

「ア、それは私の定紋が附いてある、誂へたのか」

「羽織から着物袴を篤つくり御覽じませ」

「徳兵衛、それは私が本家に居る時分に着てた着物や、是れ何うしたんや」

「是れは黙つて貴方さんを御養子にお上げ申す譯には参りません、親旦那さんに斯く／＼斯様な次第で、御養子に差上げますとお話申しますと、親と云ふものは結構なもので、涙を溢してお喜びになりました、久離切つて勘當仕た者はあかの他人、其の様な者に塵芥一本祝ふ因縁は無いが、此方の親切に免じて、一ト重だけお前に祝ひます、何うぞ不都合の無い様に云ふて聞してやつてくれ、家は兄が立派にやつて居る、他家へ行つて粗忽を仕てくれたら矢ッ張り兄の顔に關るよつて、よう云ふて聞してやつてくれと、涙を流してお頼み、兄様に内密で丁稚さんに持たしておくれなごつた御心のこもつた御紋附戴いてお召なされや」

「そうか、お父さん大きに有難う御座ります、おありがとうさんで、ござります……」

「若旦那、けつたいな物云ひをしなはん」

「永い間着物を着た事が無いよつてに、絹物を着ると何んやグニャ／＼仕て、腐つてる様な氣持がするわ、袴も暫く着けた事が無い、腰板が前か後か解らへん」

「若旦那さん立派な事、お歸りになつた時のお姿と甚い違ひだす事」

「あの時の乞食の姿を繪に書いて残して置いたらよかつたな」

「何をおつしやるねン、若旦那、別に恩も義理も御座りまへんが、家の者が心配を仕たと云ふお氣が御座りましたら、他人ばかりの所で御座りますよつてに、居辛い事も御座りませうが、其所を何卒御辛抱遊ばせ、辛抱が大事で御座ります」

「おとわ、是れで頼み納めやよつてに、モウ一度だけ私の頼み聞いてんか」

「若旦那さん、何で御座ります」

「今晚夜通し此所の家の表戸を開けて置いて、夜中にバリ／＼が始まつたら逃げて戻つて來るかも知れんよつてに」

其の間に日が暮れて、丁稚が定紋の附いた提灯を持つて先に立て、徳兵衛も紋附袴に草履穿きで附添ひまして、若旦那の身體は宙に浮いて居ります、女房のおとわは入口に立つて門火を焚く、

「徳兵衛、氣色がえいな、此様な嬉しい事は無い、養子に行くと云ふもんはえゝもんやな」

「そりや當り前で御座ります、一生の身の納りが附きますのんや」

「是れから毎晩養子に行つたら」

「毎晩養子に行つて堪りますかいな」

「えゝな、こんな風體を仕て、素見に行きたいな、馴染の女に見せたいな、（ひやかしが表に立